

2020年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

法師蟬三度は鳴かず賤ヶ岳
刺し違へたる蠶螂の鎌と鎌
秋暑し看護師の手の走書き
黄金の国と記され露の玉
片仮名の八雲の手紙すいつちよん
秋暑し残り少なき置き薬
相談にのる人が居て夜長かな
瓢箪をかき分け主の出できたる
秋暁や時計の音に風の音
隧道の手掘りの跡や白木槿
この先へ来るなとばかり秋の蜂
せかせかと下駄鳴らし来る盆の僧
子の試作三年にしてマスカット
蚯蚓鳴くと預りし亀脱走す
これまでの半量ほどを菜種蒔く
鬼灯の鉢ぶら下げて銀座線
虫すだく名胡桃城址崖に果つ
足すこしぬれてうれしや秋の草
枯蓮や風の音ある池の端
せつかちな間違ひ電話秋暑し

氷壺集

河村 純子
吉田多々詩
中嶋 文子
古川 邑秋
大石 高典
南田美恵子
鈴木 春菜
仁田 浩
川上 和昭
渋谷 啓子
中島 冬子
佐々木 成
中野 梓
西村みゑ子
羽鳥 正子
益子 桂子
宮澤 淑子
木村 静子
中井 昭雄
森 すゞ子

氷室集

此の秋は体温計も楽屋内
二の腕に風の確かな今朝の秋
藪蘭の紫を摘む秋驟雨
運動会ゴールの先にある記憶
高原の秋の七草抱き帰る
枸杞の実や街道筋のはけてふ地
尻尾ほどぜんご鋭き真鱈かな
稲架組むや山越えてくる雲低し
敬老の日とて一日茶碗売る
秋高し迷ひ迷うて貴船口
遅く出て貴船の月はすぐ隠れ
こぼれ萩掃けど掃けども地に縋る
いまもなほ武田軍団露の墓
いざよひや錆びたる弦に「神田川」

河村 純子
仁田 浩
朝田 玲子
古川 邑秋
佐々木 成
羽鳥 正子
大石 高典
渋谷 啓子
谷口 文子
宮原亜砂美
鳥居 裕子
西五辻芳子
宮澤 淑子
碓氷 芳雄

狐雨降るや夕陽に秋の虹
和太鼓の桴の乱打や秋暑し
枸杞の実に誇り満ちたる回の村
夜なべする此の空間の心地よし
建具屋の鋸屑の香や秋気澄む
ニューヨークの月にも同じ兎みて

片山 旭星
櫛淵かりな
富沢 壽勇
山本 京子
木村 静子
福 のり子

2020年11月

氷壺集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

出羽三山仰ぐ平野や稲の秋
熟れ頃や猿の見過ごす瓜の味
日本語の副詞虚しき原爆忌
秋茄子の重荷を下ろすごとく穫る
風鈴を狂はせてゐる夜風かな
山越えの力を賞ふ岩清水
赤とんぼ竹の箒がお気に入り
神鳴も雲踏み外すとは涼し
人を待つホテルのバーの金魚鉢
定位置を探して歩く大文字
秋立つや押しピン残るメモボード
嶺の端へ月重たげに昇り来る
上出来の南瓜ひとつをおためとす
風さそふ子規の淡彩秋海棠
真夜中に鐘撞くことも夏行かな
蟬しぐれ消ゆ八月のあの時刻
廃校に残る土俵や花木権
ふと風の音にまぎれて秋の蝶
見失ふまで振り返り秋の蝶

宮澤 淑子
中嶋 文子
大石 高典
羽鳥 正子
酒井 富子
佐々木 成
友永基美子
西村みゑ子
河村 純子
鈴木 春菜
古川 邑秋
渋谷 啓子
吉田多々詩
鴻坂 佳子
南田美恵子
川上 和昭
木村 静子
川内 麻美
川内 一浩

氷壺集

六斎の闇打つ鉦の里に住み
大豆稲架はぜる音なくはぜにけり
レポートの採点つづく法師蟬
朝顔の同じ色して同じ向き
刀豆の太りて刃とはならず
蜜豆の光ざくざくざく揺らぐ
野ぶどうを摘む子泣きべそ日暮れ来る
鬼灯やおぎなひ合うてひとつの目

吉田多々詩
古川 邑秋
大石 高典
川内 麻美
木村 静子
富沢 壽勇
牧田満知子
山本 京子

稜線の影まで朱し夏の月
流星群寝ころんで待つ秋隣
鳳仙花する寄る猫に種はじけ
夏安吾や動物園の檻の中
微地形を秋風に聴く朝散歩
弦に触るる弓の角度や星月夜
カルデラのここ真ん中の大暑かな
寂しさを募らせて露草の露
岩壁の霧の隙間の岩桔梗
新涼や社の杜の木々さやぐ
花木槿遺影とならぶ未完の絵
夏に入る花見小路に下駄の音

碓氷 芳雄
森川恵美子
山田ミチ子
河村 純子
小嶋 和
朝田 玲子
仁田 浩
川内 一浩
野木 正博
片山 旭星
小堀 恭子
三原真紀子

2020年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

わづかづつ湖は北へと鳥渡る
機嫌よき鳥海山よ五月晴
社会的距離とり大き茅の輪かな
ゆつくりと夏霧はれて港の灯
地図帳に少年の夏捜すごと
万緑へ深く入り来て魚板打つ
ことしまたななふし宿る木の葉かけ
川音を近くに住めり夏の月
ビル街の暮れてきはやか二重虹
小次郎の燕返し捕虫網
梅雨の間や遺跡に四隅袖付炉
老鶯の小路や波郷歩みしか
胡瓜封ず蘇民将来子孫なり
子蜥蜴を宝のやうに見せにくる
白雪にさらせし越後上布着て
全集の紙の湿りや松落葉
小刻みに草の揺れをり糸蜻蛉
鳳仙花弾くる種に明日あり
池塘ぬけ燧ヶ岳へ青野かな

古川 邑秋
佐々木 成
大石 高典
宮澤 淑子
河村 純子
酒井 富子
栗本 一代
渋谷 啓子
中嶋 文子
吉田多々詩
羽鳥 正子
川内 一浩
栗本 徳子
鴻坂 佳子
西五辻芳子
川上 和昭
南田美恵子
友永基美子
中井 昭雄

氷室集

ラマ僧のくるぶし細き素足かな
守宮鳴くにガムランの音森の闇

宮澤 淑子
河村 純子

新しき香水にして梅雨明けて
土担ぐ茗荷の子あり脱稿す
瀬田川は琵琶湖の出口梅雨明くる
み仏に夕風至る寺門かな
球磨焼酎その里に梅雨出水痕
六月の海一枚の青さかな
振花の振れて咲くを待みとす
水煙の高きにまばら梅雨の星
空缶を拾ふ作業や草いきれ
白蓮のなかの一輪紅蓮
氷室の使通ひし道か合歓の花
河童忌や小さき門に雨宿り
星合や一語に願ひあふれしめ
被爆語るに長命たれと祈る夏
身の丈に進む尺蠖跳んでみよ
不整脈またおきてをり半夏生
解散の声にはじまる夏休み
富士山の伏流水の鰻はも

小島 和
大石 高典
齋藤 耐
川内 一浩
片山 旭星
佐々木 成
川内 麻美
鴻坂 佳子
碓氷 芳雄
南田美恵子
西五辻芳子
古川 邑秋
山本 京子
石田 祥子
渋谷 啓子
朝田 玲子
仁田 浩
富沢 壽勇

2020年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蜘蛛飛んで初めの一糸掛けにけり
水底の影の俊足みづすまし
少年の大きな歩幅緑さす
蝙蝠の昼は埒となる祠
植田より水の漏れゆく休耕田
サイレンの遠く消えゆく茂かな
螢火の一つを追うて森に入る
新じやがをスープに仕立て給料日
道開く地目原野よ合歓の花
雲低くよどみてありぬ栗の花
足元に卵の殻や燕生る
睡蓮や八雲遺愛の長煙管
ざりがにのバケツを囲む坊主刈り
夏半ばズボンの寝押しずれやすく
薫風や土手より拝む阿弥陀さま
如何にせむ一個のみなる初なすび
江戸切子冷酒はこれと決めてをり

渋谷 啓子
中嶋 文子
佐々木 成
中井 昭雄
古川 邑秋
鈴木 春菜
山本 真也
大石 高典
羽鳥 正子
森 すゞ子
中島 冬子
宮澤 淑子
吉田 多々詩
益子 桂子
南田美恵子
長浜 利子
川上 和昭

梅雨空や買ひ足しておく肉野菜
餌を運ぶ蟻ころびつつまるびつつ

川内 麻美
川内 一浩

氷室集

梔子の香り重たし傘の下
夏星を追うて珈琲冷めきつて
六月の篝火重く尾を引けり
蚕の子の磯飛び渡る跳かな
遠隔の会議果てたる素足かな
コココーラの赤よく目立つ海開
泥んこの顔見合はせて田植の子
舗装路に泥の足跡田植どき
短夜や砂吐く貝のひっそりと
万緑や禰宜の袴は水の色
比叡より貰ひしものに田植水
ドーナツの穴の向うに夏休み
向日葵や寝る間を惜しむごとく伸び
岩走る水の冷たさ山女釣
階を見上ぐる一步より登山
かすかなる苔の起伏や杉木立
若楓陵墓の森を大きくす
ゆるやかな坂道を行く薄暑かな
いにしへの環濠奈良の牛蛙
さりげなく蜂をよびこむ破れ傘

朝田 玲子
福田 将矢
渋谷 啓子
佐々木 成
富沢 壽勇
碓氷 芳雄
中野 悦子
大石 高典
小嶋 和
木村 静子
片山 旭星
河村 純子
中嶋 文子
小川 妙子
川内 麻美
宮澤 淑子
古川 邑秋
川内 一浩
中村 順次
城戸崎雅崇

2020年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

植田なる里げこげこと眠られず
時計草きりきり巻いて垣低し
郵便物畦に届きぬ田植時
地の甘さ陽の苦さとも松葉独活
デワクジラ出土の丘や苜蓿
薫風や山路ここより透きとほる
一輛を離し支線へ青田風
春キャベツ半玉分の蟠り
穂の小さき原種の小麦葉草園
大庇より紺碧へ黒揚羽
風薫る一年生になりし声

中嶋 文子
木村 静子
中島 冬子
栗本 徳子
佐々木 成
河村 純子
仁田 浩
山本 真也
宮澤 淑子
川内 一浩
川内 麻美

禅寺や房の短き藤の花
通し土間出づる眩しさ櫛若葉
居座りし棚田の巨石青田風
飛び立てる雀の嘴に桜の実
母の日やエプロンはもう欲しくない
奈良町の身代はり申や柿若葉
籐椅子の軋みてなじむ背中かな
ゆるやかに鯉の影消ゆ蓮浮葉

大石 高典
羽鳥 正子
渋谷 啓子
南田美恵子
長浜 利子
古川 邑秋
益子 桂子
森 すゞ子

氷室集

緋目高や玄関に置く杖一つ
ハンガーに眺めて夏のワンピース
紅ばらを剪り薔薇の木を鎮めけり
気配あり蛇横たはる谷の道
十三仏巻き納むるやえごの花
薔薇咲くや留鳥のごと氷川丸
春惜しむ岸や声なき太田川
草蔭を出たり消えたり夏の鴨
自転車の出前行き交ふ春の雨
との曇るきのふやけふや時鳥
分け入りて見失ひけり山桜
播州の御坊のたより笥来
忙しげに飛び大梁へ夏燕
父の手を離さず夏の坂の町
風薫る宇治の中洲に戦の碑
鎌倉や古樹の重たき青嵐
田蛙や疫病封じの藁人形
げんげ田のあるを知らずに時過ぎぬ
魚屋に行列ができ初鯉
古墳近く住み生涯の田を植うる

川内 麻美
中嶋 文子
古川 邑秋
野木 正博
朝田 玲子
宮澤 淑子
碓氷 芳雄
富沢 壽勇
石原ゆき子
羽鳥 正子
斎藤よし子
鴻坂 佳子
南田美恵子
川内 一浩
片山 旭星
林 剛
佐々木 成
河村 純子
大石 高典
木村 静子

2020年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蕨採る猿との距離を測りつつ
玄米の発芽の早さ花の昼
鮮やかやチマのごとくに山躑躅
草の芽や老いて手にする学生証
焼原や埤が黒き跡となり

中島 冬子
鈴木 春菜
栗本 徳子
古川 邑秋
中嶋 文子

いたどりの笛を上手にまたぎの子
休業の張り紙の店燕来る
白壁のこんなに白く春きたる
鳥雲に關八州の空ひとつ
春陰や海に戻りし干拓地
重文の屋根の藁引く春の鳥
復活祭くつくと啼ける白き鳥
少年野球ひとりは少女花吹雪
この仔猫「吾輩は」とは言はせぬぞ

佐々木 成
河村 純子
仁田 浩
川内 一浩
宮澤 淑子
羽鳥 正子
川内 麻美
渋谷 啓子
中井 昭雄

氷室集

鳥海山の風吹き渡る牧開
遠足の列を離れて象の前
黒玉にみるみる手足出でて蝌蚪
今日からは燕加はる峽の空
水耕の根のにぎやかにヒヤシンス
一群の墓石隠せる朧かな
花屑の光の嵩よ日照雨来る
松筆鳥榿の樹冠を這ひまはる
ささめきは石を転がす春の水
隠れ入る鯉や疏水の花筏
父が酒場よりもらひ来し仔猫かな
帯なして稚魚の大群春闌くる
大口の馬の欠伸や海のどか
風光る鰻絵の竜の動くがに
父の皺の来し方探し花見酒

佐々木 成
川内 麻美
福田 将矢
長浜 利子
仁田 浩
吉田多々詩
宮澤 淑子
堀口 忠男
林 剛
野木 正博
川内 一浩
大石 高典
南田美恵子
木村 静子
碓氷 芳雄

2020年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

春宵やベテルギウスは生き残る
一碗の茶を点て坐せば西行忌
文政の算学掲げ梅の寺
朧夜や君に抱かれてぬひぐるみ
春暁や靱蔓の壺の奥
夕桜下枝を水に遊ばせて
肉球の破れし犬や獺期果つ
僧列の袍衣うつくし涅槃西風
やや紅の勝ちに源平桃の花

仁田 浩
川村 純子
木村 静子
川内 一浩
川内 麻美
中島 冬子
大石 高典
栗本 徳子
中嶋 文子

畑焼くや白き頂きはだちぬ
引つ越しの合間に出され土筆和
おつとりとして敏捷な春の蠅
半島の巨岩奇岩や鳥帰る
啓蟄や土を均して文字遊び
翅畳み蝶は枯葉となりてをり
菜の花や川幅広き橋渡る
陵の北面を守る椿かな
石室に春日さし込み鳥のこゑ
早春のペットボトルの水を飲む

益子 桂子
鈴木 春菜
長浜 利子
佐々木 成
山中ひでの
羽鳥 正子
渋谷 啓子
古川 邑秋
栗本 一代
山本 真也

氷室集

廃村の蝌蚪の犇めく水たまり
馬の仔の尾の短くて忙しなき
地球儀を消毒したき春の星
木蓮のみな空を向きあいそなし
母を真似さくら隠しを掌に
沈丁花ふあつと香る待ち惚け
川波寄る貝塚遺跡初蝶来
北嶺に彼岸の夕陽掛かりける
王羲之の書にも春風見つけたり
垂直の梯子は地下へ独活の室
道問へば堇の方へ行かれよと
囀を吾に訳する器械欲し
猛る風バター茶を煎るゲルの春
鈴の緒に除菌の湿り春寒し
生薬の瓶並ぶ棚あたたかし
拍子木の響き淋しき浪花場所
古井戸の井桁囲ひや諸葛菜
茅葺屋根の天辺にあり名草の芽
春昼のないしよ話は堰を切り
忘るまじ被爆桜の咲き誇る

福田 将矢
朝田 玲子
河村 純子
仁田 浩
川内 一浩
川内 麻美
佐々木 成
齋藤 耐
小堀 恭子
益子 桂子
林 剛
長浜 利子
牧田満知子
宮澤 淑子
木村 静子
片山 旭星
中村 順次
渋谷 啓子
中嶋 文子
田中 勝

2020年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出 5月号

氷壺集

発酵の樽まるまると春動く
眼ぢからのありて強者や寒稽古
梅咲きて雀の声を明るうす

仁田 浩
中嶋 文子
川内 麻美

梅二月人それぞれの最寄り駅
修二会僧の息うかがひぬ女人講
夕暮や雪野に点る牧舎の灯
封をしてのち誤りと言ふ余寒
梅一輪お目見えの妓の簪に
たつぷりと水ゆつたりと梅の花
覆面の寡黙に懸想文を売る
ビル影の角円くして朧月
宿木へ鳥繰る閏二月尽
当麻寺の青き双塔おぼろ月
燻りへ焼べ足ながら耕せり
白魚の数が動いてみたりけり
水蠶ひそむ深山の水の温みけり
花鳥はいづこの深空より来しか
計らひの思はぬ方へ山笑ふ
慰霊碑の前後左右に猫の恋

川内 一浩
栗本 一代
佐々木 成
大石 高典
河村 純子
鈴木 春菜
栗本 徳子
中島 冬子
宮澤 淑子
鴻坂 佳子
羽鳥 正子
古川 邑秋
長浜 利子
西五辻芳子
中井 昭雄
山本 真也

氷室集

待合へ招き入れたし雪だるま
母の手をしかと握る児梅若忌
蛇出でてホモサピエンス囲みある
自動ドアより鬼来たる節分会
固まりし蜂蜜ゆるむ春隣
多喜二忌や波猛り立つ北の海
筆塚に筆一束や梅紅し
敷藁の順路に梅の花二つ
促音まだ書けぬ手紙よ春の風
しぶき凍り同じ向きなす谷の岩
似我似我と羽音聞き止め蝶嬴追
菜の花や故郷の土手は滑り台
冴返る比叡に続く雲母坂
観潮の顔打つ髪や風の息
絶筆は平和の二文字春ともし
壬生寺のカンデンデンと厄払
師の師なるお墓に参り余寒なほ
長靴のしだいに重し凍ゆるむ
御勝手にとんかち振るひ牡蠣を剥く
廃校の庭や往時の寒椿

中嶋 文子
河村 純子
福田 将矢
仁田 浩
大石 高典
佐々木 成
木村 静子
鴻坂 佳子
宮澤 淑子
野木 正博
西五辻芳子
田中 勝
片山 旭星
朝田 玲子
吉田多々詩
南田美恵子
川内 麻美
益子 桂子
宮原亜砂美
碓氷 芳雄

2020年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

背を向けて毛布被るはボスゴリラ
 めて鯛の双び飾りや初芝居
 吐く息にわらぎの構へ初稽古
 正月や喜多さんにとふ山の道
 風筋に逆らひて行く寒念仏
 とつぷりと暮れ寒柝の次の音
 勝負師の顔つきとなり歌留多取
 酒粕や杜氏の友の寒見舞
 大跨ぎに京の都を冬の虹
 寒灯の深きに人が錫工房
 繭玉や天井高き里座敷
 淑気満つ大神神社のお手洗
 御火焚や競ふ炎と小山伏
 初夢に大論文を書き上ぐる
 八雲立つ出雲の村に寒の雨
 年越ゆる音なき音に耳澄まし
 お降の傘干されあり社務所脇
 関所跡の武具に埃や日脚伸ぶ
 一途とふ思ひは秘して鷹放つ

氷壺集

川内 麻美
 栗本 徳子
 中嶋 文子
 鈴木 春菜
 木村 静子
 川内 一浩
 南田美恵子
 中島 冬子
 河村 純子
 鴻坂 佳子
 佐々木 成
 山本 真也
 古川 邑秋
 大石 高典
 三原真紀子
 中野 梓
 西村みゑ子
 真下 章子
 羽鳥 正子

氷室集

棒鱈を好物と言ひ嫁となり
 春闘や靴のかかとの減り具合
 武蔵野に霜の広がる開墾地
 野兎の足跡続き山眠る
 鯛待つ男の影や番屋の灯
 重ね着に故郷の匂ひありにけり
 本棚の上くれなゐの冬薔薇
 大寒や妻踏みたがる水溜り
 薬剤名の百頁ほど店卸
 煮凝や取皿の絵のみな違ふ
 声援を背負うて走る冬の風
 しんと来るもの耳にあり枯木山
 突き一発動から静へ寒稽古
 白金の冬の月あり銀閣寺
 馬運搬車ぬくぬくと揺れオリオン座
 大寒の時針まちまち時計店

河村 純子
 大石 高典
 林 剛
 佐藤 聡
 佐々木 成
 福田 将矢
 川内 麻美
 川内 一浩
 中嶋 文子
 羽鳥 正子
 田中 勝
 堀口 忠男
 吉田多々詩
 野木 正博
 朝田 玲子
 渋谷 啓子

まだかまだか年終るぞと誕生待つ
消ゆと見せ水に還りし春の雪
己が影に手をふる幼ナ春隣
立の字の如き花芯や冬椿

西五辻芳子
小嶌 和
宮澤 淑子
昌山瑠美子

2020年3月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

聖夜ミサ少年の目に灯の揺れて
朝まだき足袋の小鉤の冷たさよ
内海や島のかたち冬に雲
藤十郎とある簪や事始
コッヘルの雑炊旨し峰に入る
どんど焼煤にまみるる村百戸
白山の冠雪を背に笠地藏
言霊に色あるならば竜の色
ブルースよりワルツにかはり年の暮
獣肉とジビエの違ひ山鯨
ジンライム色の月なり十二月
轆轤挽きの椀手に馴染む干菜汁
赤福屋の釜に湯気立つ小春かな
行きたきと地図を眺めて着ぶくれて
被爆樹の実生の若木黄落す
腰痛はともかくとして年を越す
卓上に千両一枚ある朝餉
隣人の芝に気づきし枇杷の花
亡き父の座は空けておく節料理

栗本 徳子
河村 純子
中嶋 文子
中島 冬子
中井 昭雄
佐々木 成
三原真紀子
川内 一浩
仁田 浩
大石 高典
西村みゑ子
羽鳥 正子
森 すゞ子
川内 麻美
宮澤 淑子
山本 真也
川上 和昭
南田美恵子
古川 邑秋

氷室集

間の悪き鼓の音よそぞろ寒
横文字のただただ走る夜なべかな
星屑の星を纏ひて冬並木
冬の芽や生きて生き抜く被爆樹も
白萩や月はゆつくり遠ざかる
炭俵編むや山家の土間昏し
キネシオテープ馬に貼りやる小春かな
雨音の霰に変はり朝まだき
冬ざれて象の睫毛の長きこと

河村 純子
大石 高典
小嶌 和
田中 勝
堀口 忠男
佐々木 成
朝田 玲子
中嶋 文子
福田 将矢

煤逃の夫より掃除機のルンバ
暮早し馬籠に灯る常夜燈
風花や移ろふものにある光
山茶花や丈山の門くぐるとき
弾きなれし琵琶の重たき春星忌
風が掃く落葉の出町柳かな
玩具こそ技術の粋やクリスマス
おそろひのひとつとなりぬマフラーよ
ゆつたりと広島湾の鰯群れ
海峡の潮動きそむ冬夕焼
新駅やおでん屋台の名残なく

川内 麻美
長浜 利子
川内 一浩
石神 主水
片山 旭星
鴻坂 佳子
仁田 浩
谷口 文子
野木 正博
宮澤 淑子
三原真紀子

2020年2月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

鉦の音少しずれたり十夜講
大の字の火床ほつほつ草紅葉
初霜に観念したる庭の草
風垣を大きく組んで村黙す
一茶忌と知つてか庭の雀来て
冬もみぢ蔵飛ぶ絵巻みてをりぬ
藪沿ひに行きし狐が藪に消ゆ
峠へと続く落葉の音を踏む
瓢の実や忙しくなき振りをして
落葉踏み昨日の私消してゆく
矢狭間より光の矢来る小六月
輪の中に入らぬ子あり返り花
秋時雨やつつけ仕事ふたつあり
櫛紅葉お頭と云ふ大天狗
蒲団干すずしりと重き歳の数
長明も見しか日野路に狸出づ
石段に宿題する子小六月
冬蜂のとどまる石の温みかな
お手玉の掌に憶えあり一葉忌

栗本 徳子
鈴木 春菜
中島 冬子
佐々木 成
三原真紀子
宮澤 淑子
羽鳥 正子
川内 一浩
大石 高典
河村 純子
木村 静子
南田美恵子
仁田 浩
川上 和昭
吉田多々詩
中井 昭雄
渋谷 啓子
酒井 富子
鴻坂 佳子

氷室集

口長き矢柄を食ひて冬に入る
組み上げて音なく昇り鷹柱

大石 高典
堀口 忠男

馬の背の右や左や秋深し
星月夜首里城惜しむサンダンカ
ぶり大根母の威厳の保たれし
波郷忌の落葉掃く日と定めけり
鷓猛る戌辰の役の墓荒れて
枯芝を背中一杯付け歩く
きのこ干す同じ筵の柿の皮
付添ひやおでん腑に染む三泊目
綿虫の寄らず離れず暮れはじむ
山茶花やしかけ雨戸の武家屋敷
国境の無き鐘の音や冬の雁
短日や長き休符のやうに闇
何万の紅葉のひとつ拾ひけり
時雨るるや比叡に虹の消えるまで
冬めくや早寝にありぬ日の温み
冬着干す小まめに向きを変へながら
時雨るるや庁舎すつぼり虹の中
三河なる回船問屋縞布団

野木 正博
宮原亜砂美
谷口 文子
川内 麻美
佐々木 成
川内 一浩
仁田 浩
朝田 玲子
真下 章子
木村 静子
河村 純子
昌山瑠美子
伊藤 惠
片山 旭星
酒井 富子
羽鳥 正子
渋谷 啓子
宮澤 淑子

2020年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

山を背に舟屋のくらし秋うらら
白一花酔ひそこねしか酔芙蓉
二人分もらつて帰る栗おこは
風の来て音立ちはじめ鳥威
神域のほとりつましく秋耕す
鳥威夕闇ひたと迫り来る
靴底の草の実落とし尾瀬に入る
秋薔薇の新芽の棘の紅きこと
天高しネクタイ決めて日曜日
尾根つなぐ出羽三山や雁の棹
木道の右を譲りて野路の秋
原稿を置き去りにして秋祭
秋深し失礼ながら名を質す
尊徳の本湿らせて秋時雨
ゆつくりと来てゆつたりと秋の蝶
焼藪の熱きを胸に少女駆け

栗本 一代
中島 冬子
鈴木 春菜
益子 桂子
木村 静子
羽鳥 正子
長浜 利子
川内 麻美
中嶋 文子
佐々木 成
川内 一浩
大石 高典
仁田 浩
古川 邑秋
渋谷 啓子
本多 智恵

身に入むや鸚哥の墓に石一つ
行く秋の河口に舳ふ舟灯り
先に逝きし弟君と花野へと

森 すゞ子
鴻坂 佳子
西五辻芳子

蠮螋の雄かも知れぬ放ちやる
劇場を出づれば月の街ロシア
がらんだうの牛舎を抜くる葛嵐
長き夜や藍甕の泡ふつふつと
ひよんの実の鈴なり風の吹くばかり
口琴の音色過ぎ行く秋の路地
しづもれる小雨となりぬ冬隣
赤き実の子の記念樹や小鳥来る
赤い羽根夫の取り出す小銭入
作り置くもの食卓に颱風裡
諍ひの後の洗濯天高し
円を描き線をつなぎて林檎剥く
虫の音の細くひそめる雨の夜半
影ひきて白き猫ゆく秋の道
まもなくと車窓の秋の海を待つ
朝採りの丹波松茸香るのみ
花言葉は唯我独尊秋の雨
秋雨や傘持つ母が改札に
秋深し親に不幸と侍真僧
爽やかや子に初めてのホームラン

氷室集

川内 一浩
河村 純子
佐々木 成
朝田 玲子
木村 静子
川竹 美樹
羽鳥 正子
酒井 富子
川内 麻美
中嶋 文子
谷口 文子
昌山瑠美子
片山 旭星
鴻坂 佳子
小島 和
石原ゆき子
石神 主水
佐藤 聡
細見 昌代
中野 梓